

谷崎記念館だより

vol.4 2022

潤一郎あれこれ

文豪谷崎の大衆小説 — 戦国大活劇「乱菊物語」—

学芸員エッセイ

時は戦国、舞台は播州の港町室津（現兵庫県たつの市御津町）。遊女たちが艶やかに練り歩く「小五月祭（こざつきまつり）」もたけなわの中、遊女「かけろう御前」をめぐる恋のさや当てがからむ、中国渡りの珍宝の争奪戦。土地の領主や武者・海賊、果ては妖しげな幻術師まで入り乱れ、祭りの華やぎを背に剣戟（けんげき）の音も高く、丁々発止の大活劇が繰り広げられるのであった・・・。

「乱菊物語」は、血沸き肉踊る波乱万丈の戦国エンターテイメント、フィクション性豊かな「空想時代小説」である。日本画の巨匠北野恒富の挿絵も躍动感にあふれ、ハラハラドキドキの物語に彩りを添える。

大正期以降、第一次世界大戦を背景とする好景気の中で、近代化の進行と都市社会の成熟とともに、読書・出版文化の社会的な裾野が画期的に広がっていった。1冊1円（今なら3~4000円くらい）と、従来に比べ安価で手軽に手にとれるようになつた「円本」の大ブームが象徴するように、多くの人々が本を買い読むようになってきたのである。一方、作家の側も、印税によって生計を立てることができるようにになってきた。そして、こうした動向を背景として、日本の「大衆文学」もようやくその姿をあらわしてくる。昭和5（1930）年に新聞連載が始まった「乱菊物語」は、そんな新しい文学の勃興を好意的に受けとめた、谷崎じしんによる大衆小説であった。

文豪にとって、新たな挑戦でもあったこの作品。が、そこには、そもそも虚構を操る「ものがたり」の作家としてデビューした、谷崎の真骨頂がむしろよくあらわされている。稀代のストーリーテラー谷崎、面目躍如の一篇といったところか。一方でまた、その荒唐無稽な内容が、現地での綿密な取材にささえられているというところも、谷崎の執筆流儀を示していて興味深い。

諸事情あって、連載は前編で中断したものの、手に汗握るスペクタクルな大活劇は読みごたえ十分。中断はかえすがえすも惜しまれるが、その思いは谷崎も同じだったらしく、晩年も続編執筆を模索していたといわれる。

芦屋市谷崎潤一郎記念館 井上勝博

谷崎記念館だより 2022

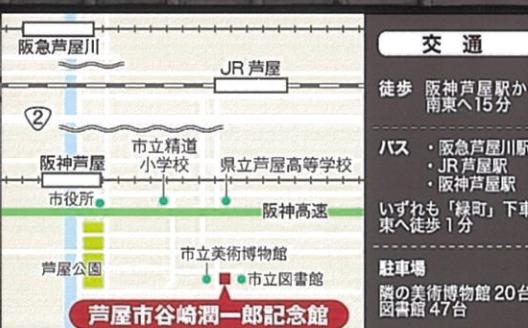
2023年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

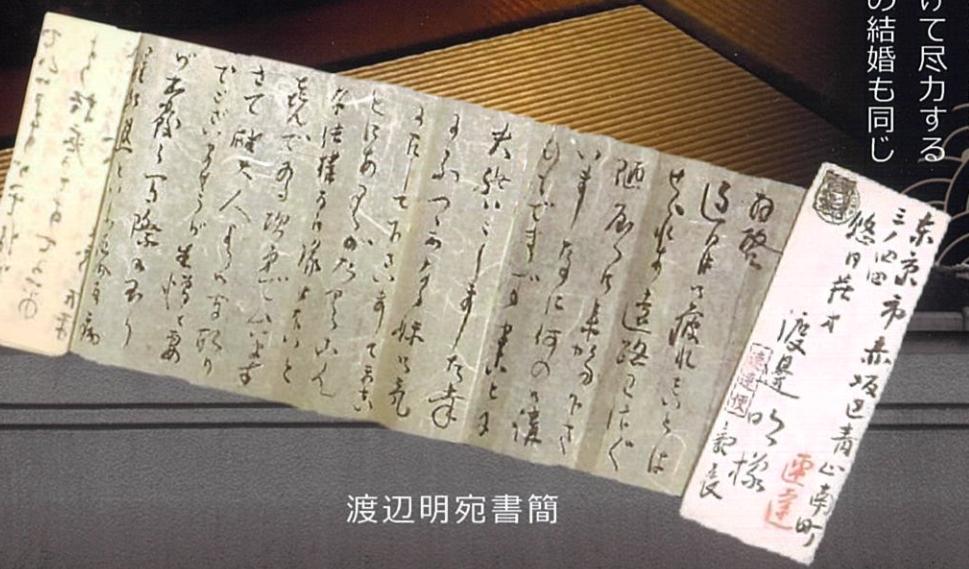
〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP : <https://www.tanizakikan.com/>



「乱菊物語」挿絵原画（館所蔵）



渡辺明宛書簡

芦屋市谷崎潤一郎記念館

「細雪」のヒロイン雪子は、何度も見合いを繰り返すが、結局は望みどおりに家柄の良い男性と結婚する。渡辺明は、雪子が嫁いでいくその相手、御牧実のモデル。谷崎の妻松子の妹で、雪子のモデルとなつた重子の夫となる男性である。

御牧が建築家で藤原氏の流れを引く名門の出という設定は、渡辺明が木工家で徳川の血筋であつたことを踏まえたもの。明の作品は贅沢な意匠で、幾度か家具展を開くほどであった。しかし、重子と結婚した当時は戦時下ゆえ、工房も閉鎖していたといつ。

渡辺明に宛てられた谷崎の書簡は、昭和16（1941）年1月23日の日付。松子の病氣で結納は遅れるものの、重子と明との縁はゆるがないものであることを伝え、義妹の結婚に向けて尽力する谷崎の姿が見てとれる。重子と明との結婚は、昭和16年4月。「細雪」の雪子と御牧の結婚も同じく、昭和16年の春。そしてそれは、この名作の終幕でもあった。